

『拙古堂日纂』の研究

— 近世中期上方における明清書学書の受容 —

稲田 篤信

(一)

『拙古堂日纂』（三十九冊。大阪府立中之島図書館蔵）、『拙古堂雜抄』（十二冊。国立国会図書館蔵）は、大坂の儒者奥田松斎（享保十四（一七二九）年生—文化四（一八〇七）年歿）が明和から享和にかけてのほぼ三十年間に新渡の漢籍から讀書に従って文章を抜書したものである。⁽¹⁾近世中期上方の漢籍の讀書ノートとしては、『奚疑齋藏書』（沢田一齋）、『過目抄』（都賀庭鐘）、『古香齋筆記』（森川竹窓）などが知られるが、松斎の讀書ノートは明清漢籍の受容実態を考察する上で質量ともに注目すべきものである。

『拙古堂日纂』の第二十九冊から第三十二冊まで、また『拙古堂雜抄』の第一冊から第七冊までは、「古書序跋全抄」、あるいは「古書序跋雜抄」と称し、松斎披見の本の序跋を別に写している。おそらくは松斎は解題代わりに写したのである。松斎の序跋への特別な関心は興味深く、序跋（題跋集）一書の公刊を夢見ていたのかも知れない。今日、明人の序跋類は版本について見るのが早い。松斎はこれらを写しているわけである。句読が落とされているのが私には有益であるが、専

門家には内容的にも有益かも知れない。

奥田松齋は『浪華郷友録』安永四年版、寛政二年版の儒家の部に「松齋」の号で登載される。そのほか、いくつか人名録に略伝が載るが、弘化五（一八四八）年刊『古今墨蹟鑑定便覧』近世儒家之部には、「奥田尚齋 名元繼^{ケイ}、字志李^シ（志季が正しい）。仙楼^{セン}ト号ス。又尚齋ト号ス。又以テ通称トス。魯堂ノ弟。故アツテ母氏ヲ称ス。浪花ニ講説ス。左氏伝ノ癖アリテ専ラ春秋ヲ講ス。是ヲ以テ一家ノ言ヲナス。文化四年八月歿ス。年七十九」とある。²⁾これによれば、松齋の書は珍重されていたようであるが、書幅をまだ見る機会がない。『音註全文春秋括始末左伝句読直解』（『春秋左氏伝評林』）、『翻刻隸続』など松齋の関与した和刻本の序や、長久保赤水著『画図標註赤水長先生崎紀行』、荒井廉平著『古今名諺』、岡田玉山編述『唐土名勝図会』など、求められ書いた序に、自筆の板下を用いた蘇東坡風の書体を見ることがができる。大阪歴史博物館蔵木村兼葭堂筆「溪間孤亭図」³⁾のような画賛も残っている。今日特に書流に位置づけられることはないが、当時は儒家の書として尊重され、みずからも見識と自負のあったところであろう。

(二)

奥田松齋が『拙古堂日纂』と『拙古堂雜抄』において抄書した明清漢籍は数多い。儒者らしい経部史部の書もあるが、民間の学者らしく子部集部に属する本が多い。特に文人の必須の教養であった書学書や書跡に関する漢籍が多いのは当然であり、王羲之以下、蘇東坡、黄庭堅、米芾、趙子昂、董其昌、文徵明、祝允明、陳在專『秋水園印譜』、『方氏墨譜』など、多彩な法帖、印譜、墨譜の章句題跋を写している。書名を眺めると近世中期の趣味を実感することができる。今回は、その内、明清の書画鑑識録、『夢英大師偏旁字源』、董其昌の法帖その他、『芸文類聚』序王寵書を取り上げて、松齋と近世中期上方の好尚について気づいたことを述べてみたい。

松斎は抄出した漢籍の巻首題を記した際、その下や左右、又、上欄に細字で、著者（序者）、巻冊、抄書年次、新來情報、借覧の相手を記し、批語、按語を加えている。ここに貴重な記事が含まれており、その一部については先に報告した。⁽⁴⁾抄出は大まかなテーマ（博物、修辭、序跋）によって複数冊に分けて行われているので、同じ本を写した時にその都度同じ注記を繰り返している。以下煩雑であるが、注記がどのように記されているかを示すために、一例を挙げて説明する。

明末の張丑、号米庵、字叔益（一五七七—一六四三）の『清河書画舫』は鐘繇から明人までの書画鑑識録として知られる。本書は『四庫全書』に収録されて、『四庫全書総目提要』巻百十三に解題がある。

『清河書画舫』に付せられた注記の全てを掲げると、次のようになる。『拙古堂日纂』第四冊三丁裏に「張丑字青父号米庵。著。池北草堂開彫」、第二十六冊十九丁裏に「吳郡張丑青父」、また、「三帙二十本」、二十七丁裏に「以上書画舫三帙廿冊。張丑青父造号米庵」、また二十六丁上欄に「乾隆壬午醇司命曰。吳長元麗煌氏。校于池北草堂。書画舫。卷末題識」とある。さらに、第三十二冊四十一丁表に「吳郡張丑青父造」、第三十六冊三十四丁表に「吳郡張丑青父造。号米庵」、同裏に「墨林山人項元汴識」、また、「吳郡張丑青父造。号米庵先生。全部二十冊。三帙」、同冊三十五丁上欄に「△緒論。莫夥于吳弇州。書画。十字丙辰冬補脱」とある。

また、『拙古堂雜抄』第五冊四十丁表に「吳郡張丑青父造」、第八冊三十四丁表に「張丑青父造。号米庵」、同裏に「墨林山人項元汴識」、また、「吳郡張丑青父造。号米庵先生。全部二十冊。三帙」と注記する。

以上を重複を避けて整理すると、『清河書画舫』に関する注記は「書画舫三帙二十冊。吳郡張丑青父造号米庵先生著。乾隆壬午醇司命曰。吳長元麗煌氏。校于池北草堂。墨林山人項元汴識。卷末題識。緒論。莫夥于吳弇州。書画。十字丙辰冬補脱」が全てである。ここから松斎が実際に手にした版本を特定する手がかりが得られる。

北京図書館編鄭振鐸『西諦書目』子部には清乾隆池北草堂刊本十二冊をあげ、わが国各文庫に所蔵する本もすべてこの十二冊本である。松斎の言う二十冊本と異なる。また、十二冊本の一つ関西大学内藤文庫本は卷一末識語を「乾隆壬午四月

上浣六日仁和呉長元麗煌氏校于池北草堂」と記す。⁵⁾ 松斎の記した識語と若干異なる。

以上のことから、奥田松斎は乾隆二十七年壬午（一七六二・宝暦十二年）刊二十冊本を安永五年丙申（一七七六・乾隆四十一年）冬までに読んだことになる。本書は刊刻する予定があった。安永六年丁酉六月刊、彭城百川編、高芙蓉・木村兼葭堂・台麓石山人補訂『元明清書画人名録』付載の「称觥堂・星文堂同刊書目略」に「清河書画舫 歷朝書画墨帖名品譜 十二冊 嗣出 明張米庵著 兼葭堂校定」とある。ここにも十二冊とある。兼葭堂の計画は松斎とは無関係に独自に立てられたのかも知れない。しかし、乾隆本刊行の十年後に舶載を見て、松斎と兼葭堂が大きな興味をもって読み、二人の話題に上り、やがて兼葭堂の和刻本の刊行に至ったと考えてよいだろう。

『江邨銷夏録』三巻は清高士奇撰。本書も晋唐から元明までの書画佳品の鑑識録であるが、『商舶載来書目』には「江邨銷夏録 一部一套 寛政三辛亥年」とあり、寛政三年（一七九一）に到来している。『拙古堂日纂』と『拙古堂雜抄』の注記は、「三巻。四冊一帙。竹窓高士奇輯。序三章。乙卯三月新来。朗潤堂藏。三序凡例全文乙卯三月。以上江村銷夏録鈔卒丙辰五月」と整理できる。康熙三十二年癸酉の高士奇、朱彝尊、宋肇の序三種を持つ三巻四冊本である。関西大学内藤文庫本などのわが国に多く伝存する。⁶⁾ 松斎は寛政七年乙卯に到来した本を翌八年五月に読み終えている。

和刻本は翌九年に山口又一郎から出願された。『享保以後大阪出版書籍目録』には「江邨銷夏録 四冊 丁数二百二十五 丁 唐本翻刻 集者 清高士奇 板元 山口又一郎（北九太郎町五丁目） 出願 寛政九年十一月 許可 寛政十年二月 十三日」とある。和刻本の一つ大阪府立中之島図書館本は、刊記に「寛政十二年庚申十一月 江戸 須原屋茂兵衛 名古屋 風月孫助・片野東四郎 京都 吉田新兵衛・三木安兵衛 大阪 森本太助・山口又一郎」とある。見返し（封面）題上欄に「杏堂浜先生校定」とあり、奥田松斎の友人浜田杏堂が関わる。康熙三十二年癸酉は元禄六年（一六九三年）。寛政時が初度の舶載であったとは思われないが、上方人文社会はこういう鑑識録を必要としていたのである。

(三)

『拙古堂日纂』第三十冊四十一丁表に「夢英大師偏旁字源序」が写され、抄録文の末尾に「新興光鐘門人。都賀六藏家秘」と注記される。松斎がこの書を都賀庭鐘から借覧した旨の注記である。このことは既に別の場所で記した⁷⁾。

『夢英大師偏旁字源』（『篆書目録偏旁字源碑』）は宋人積夢英の篆書、郭忠恕楷書積字、安文燦鐫字、元守全等が北宋咸平二年（九九九）六月十五日に建碑した碑石に刻されたものである。松斎が写した碑帖の碑文は第一行の「篆書目録偏旁字源。五百四十部。其建首立」から「安文燦鐫」までの文に、夢英自序の下にある「咸平二年六月十五日建」を繋いで、その後自序を記す。郭忠恕の書状はない。

『夢英大師偏旁字源』は、曾之唯『印籍考』篆纂の部に登載され、また、新興蒙所撰『篆千字』奥書、また、庭鐘跋によれば（未見）、蒙所は寛延初年に京都で入手し、篆法開眼の書であった。岳玉淵（九疑）もこれに学んだという⁸⁾。上方の篆法家に大きな影響を与えた書である。当時珍稀碑帖に属するようで、わが国でも伝存の情報に乏しい。今は各種碑帖叢書に収録されているので容易に見ることができる。

九疑は安永版『浪華郷友録』書家の部に、「岳玉淵 過書町センダンノ木西入 岳良字兼山、一字公見、号九疑、又有鼎文堂号」とある人物である。大阪市中央区中寺町禅林寺の一隅に墓があり、墓表の数字がわずかに見える。さいわい、碑表の書影と碑文は『大阪訪碑録』に引かれている。奥田松斎撰、森川竹窓の篆字である。九疑は松斎相識の人であった。撰文に、玉淵の「論する所、六朝以下に涉らず。然れども但し、李陽冰三墳記に於いては、則ち窃かに観る所有りて、深く其の奥に詣れり。旁ら夢英字原一書を参して、年老に逮びて、輒ち其の古篆論を篆し、石に上す⁹⁾。」とある。残念ながら、九疑の「古篆論」は伝わらないが、その人の書風は寒葉斎孟喬（建部綾足）『建氏画苑』序四種の内、「明和辛卯隴月浪華木村龔識」、すなわち兼葭堂序文に見ることができる¹⁰⁾。

上田秋成は天明三年正月、九疑のために「九疑子五体千字文之序」^①を書いた。そこに、「我友九疑子は若い時からの知り合
いであった。二十歳過ぎてから一心に打ち込んで、その書論は高い境地を示した」とある。この玉淵の千字文も見出し得て
いない。ちなみに、秋成は鐘繇の千字文について触れ、「かつ鐘繇が書りしと聞えたるは、そも漢、魏の間にありて、彼八
斗の才など、世にほめた、へしたぐひの人のつゞしりなせしにやと、私には思ひけらし」と必ずしも鐘繇の作とはしていな
い。秋成模写の「鐘繇千字文」は天理図書館に残っている。

(四)

『拙古堂日纂』と『拙古堂雜抄』には、当時の人気を反映しているためか、書人の中では、董其昌（一五五五—一六三六
字は玄宰、号は思白、諡は文敏）に関わる注記が最も多い^②。松斎は董其昌の法帖、墨本、文集の章句、序跋（題跋）を写
している。巻首題と松斎の注記を掲げ、その後内容上参考になりそうな抄出記事を付して、簡単に説明する。

まず、法帖、墨本など。『清暉閣藏帖』には「二帙。十帖全。董其昌」と注記がある。董其昌書を集刻したもの。各帖所
収の其昌跋を引く。「壬申十月書各体。似斎老先生教之。董其昌」とある。壬申は万曆五（一五七七）年、董其昌二十三歳
である。

『戲鴻堂法書』には「翰林院国史編修制誥講讀官董其昌審定。以上戲鴻堂法書跋文抄。丙午七月。全四帙十六帖。寛政四
年壬子十月全鈔大尾」と注記がある。万曆三十一（一六〇三）年に勒成した其昌の代表的な集帖。十六卷。松斎は寛政四年
に写している。

『玄妙觀法帖』には「欧陽率更夢奠帖。玄妙觀重修三門記。董玄宰欧柳參合帖。晋楊羲私景経。東坡冲卿帖。以上五冊全
一帖法書」と注記がある。欧陽詢、趙子昂、董其昌、柳公権、楊羲、蘇東坡などの集帖。「東坡冲卿帖」の「董其昌。觀於

曾周翰參中。癸卯十月晦。同親陳仲醇。周仲簡。季良兄弟」の跋が全文引いてある。癸卯は、万曆三十一（一六〇三）年、其昌四十九歳である。

『玉烟堂法帖（玉烟堂董帖）』には「全六册。有目錄」とのみ注記がある。『拙古堂雜抄』第四十一丁表に「丙午六月有八日。蕪州公署避暑識。董其昌」ほかの題跋を引き、その上欄に第一卷「阿弥陀經」から第四卷「臨王逸少官奴帖」までの目錄がある。丙午は万曆三十四（一六〇六）年。また、「米芾千字文並跋」に付した「此余己丑所臨也。今又十年矣。筆法似昔。未有增長。不知何年。得入古人之室。展卷太意。不止書道也。戊戌四月三日」の文は、安永七年松齋四十九歳の感慨である。明陳瓛（字元瑞名夔号增城）彙刻の同名の法帖二十四巻をもとに董書を刻したものの¹³⁾。

『伝経堂法帖』には「帙上題曰董文敏公法書。全四帖。董文敏書序跋全抄。吳門王鳳儀鑄。第四丁之跋」と注記がある。これも董其昌書を刻したものの。「閣帖鐘王數種。雪後臨写。靜中致樂。丁未十二月七日。玄宰識」ほか、「乾隆歲次丁酉（二七六五年）。夏五月。秋厓宋思敬跋」までの跋が全部引いてある。丁未は万曆三十四（一六〇七）年、五十三歳。

『書種堂帖』には「闕本一帖。揚雄太玄賦草行。謝莊月賦行楷。全一帖。月賦畢書曰。癸丑八月八日崑山道中。董其昌」と注記がある。董其昌書を集刻したもの。六巻。「甲寅中秋日。董其昌識」、「乙卯上元日。玄宰自題」の題跋を引く。任道斌編著『董其昌系年』の万曆四十二（一六一四）年甲寅其昌六十歳の条に、「秋、八月十五日、董其昌写書種堂帖世に行われる」とある。¹⁴⁾

『来仲楼法書』には「全一帖 董其昌」とのみ注記がある。董書を集刻したもの。十巻。「辛酉（一六二一）夏五月正午日。農梳時也。其昌」の題跋がある。辛酉は天啓元（一六二一）年、六十七歳。

『延清堂法帖』には「全六巻。董其昌書外題目録付。共六帖。癸丑十月画軸」と注記がある。癸丑は寛政五（一七九三）年であるが、「画軸」の意味が分からない。董書を陳鉅昌が集刻したもの。「天啓四（一六二四）年三月望日。陳鉅昌。識」と「辛酉七日玄宰写」他の識語を写す。

『汲古堂帖』には「全六帙。汲古堂帖全六帙第四帙出欧陽詢草書千文。其昌跋蘇穿珠巷宝翰審定法帖。以上十二字朱印帙裏」と注記がある。董書を集刻したもの。崇禎三（一六三〇）年、孫董庭輯、門人吳泰裔、顧紹勳、沈肇真鑄。

『慈惠堂墨宝』には「全一帖。王羲之 樂毅論」とのみ注記がある。曾恒德撰の集帖。第一の「樂毅論」の其昌跋が全文引いてある。末尾は「甲戌六月。題于武塘舟次。其昌」。甲戌は崇禎七（一六三四）年、七十歳。

『蒹葭堂法帖』には「董其昌書。五帖」とのみ注記がある。董書を集刻したもの。米芾臨書顔真卿「宋榻争坐居帖」を写している。

『登竜洞背』には「董玄宰墨本。一帖。全文跋。原本狂草。恐当不得諛字之正」と注記がある。墨本が何をさすか、見出していない。松斎が仮に読み込んだ狂草は、「登竜洞背。無漏兄。従白下。書来索字。正月寢療。百余日。久疎筆研。乃死者立馬。需報章。紙既灰粉。筆復頽惡。灯火漫筆旧作二首。聊以塞責。不暇計醜矣。無漏以為何如。時辛亥秋夜也。董其昌」である。辛亥は万曆三十九（一六一二）年、五十七歳。

『文徵明細楷陸士衡文賦』には、「墨本跋」とのみ注記がある。文徵明の陸士衡『文賦』（嘉靖丁未九月既望文徵明識）に与えた「壬子（一六一二）十二月立春後四日。董其昌識」の「墨本跋」が全文引いてある。壬子は万曆四十（一六一二）年、五十八歳。

『其昌樂志論墨本』には、「樂志論有和刻」とのみある。和刻本は未見。「乙卯六月九日。其昌」の跋がある。乙卯は万曆四十三（一六一五）年、六十一歳。

『董其昌黄庭経』には、「一帖楷書。董其昌黄庭経跋」と注記がある。

『董其昌滕王閣序墨本』には、「丁巳臘月觀之。一行四字。一字二寸余。一字三寸余」と注記がある。松斎が目にした丁巳は寛政九年。「崇禎六年歲在癸酉之望礼部尚書兼翰林学士華亭董其昌識」の跋文が写してある。

『董其昌望水尋山帖』は「墨本」とのみ注記がある。何を指すか不明。なお、董書にかぎらず、松斎披見の書作品はほと

んどのものが刻本と考えられるが、以上の「墨本」は特に石刷の折本を指して区別したのか。

次に、文集。『容台集』には「頼古藏書。全二帙十六冊。文集十卷詩集四卷別集六卷。董其昌玄宰著」と注記がある。頼古(堂)は西田嘉兵衛。黄虞稷『千頃堂書目』に「董其昌容台集十四卷又別集四卷」と著録され、『四庫全書存目叢書』(集部一七二)所収本は明崇禎庚午(三年)陳繼儒序文集九卷詩集四卷別集四卷の董庭刻本であり、いずれにも該当しない¹⁵⁾。以上が松斎の抄録した董其昌関係の法帖、墨本、文集である。

『享保以後大阪出版書籍目録』には、董其昌の書跡が多く登載されている。『阿弥陀経』、『帰去来辞』、『関帝疏文』、『玄賞齋法帖』、『山居帖』、『絶句帖』、『画錦堂記』、『董其昌滕王閣賦』、『董其昌天馬賦』、『唐絶十首』、『東方帖』、『人々帖』の十二種¹⁶⁾である。上記松斎抄録と重なるのは、宝暦三年、本屋又兵衛から出版願いの出された『阿弥陀経』、寛政十三(享和元)年、吹田屋龍藏から願いの出された『董其昌滕王閣賦』のみ。ただし、『阿弥陀経』は松斎の挙げる『玉烟堂董帖』所収のものとは限らない。『董其昌滕王閣賦』の出刊に松斎の関与があつたかどうかについても分からない。いずれにせよ、松斎抄録、『享保以後大阪出版書籍目録』、さらに舶載書の著録する董其昌作品は極めて多く、董書の人気のほどがうかがわれる。

松斎抄録の董其昌関連書は、現在わが国に伝存するものが乏しい。以上の帖名は宇野雪村『法帖事典』、容庚『叢帖目』に大半は挙げられている。上記の各帖の説明もこれを参考にした¹⁷⁾。しかし、『玄妙観法帖』のように帖名さえ立項されないものがある。私自身が董書の研究状況に不案内のため、素人の不注意のそしりを免れがたいが、今回は松斎の経眼した董書の帖名書名を挙げて参考に供するだけでも意味があるかと思ひ、もって当時の好尚をうかがうにとどめたい。

(五)

『拙古堂日纂』第二十九冊から第三十二冊までは、「古書序跋全鈔」の外題と内題を持ち、松斎披見書の序跋類を集めてい

る。ここに有名書家の自筆版下を用いた、いわゆる版刻書法の例を見ることができ¹⁸⁾。王寵の場合を示す。

第三十二冊『古書序跋全鈔』は内扉に二十七種の序・引を掲出しているが、その一つに「芸文類聚 胡纘宗序。王寵草書 歐陽詢自序 十六本百卷」とある。同冊に『芸文類聚』の天水胡纘宗序、歐陽詢序、「嘉靖戊子冬十一月。長洲陸采子玄識」の跋が全文抄録されている。戊子は七年（一五二八）。注記を整理すると、「芸文類聚全十六冊。一百卷。刻芸文類聚序。天水胡纘宗序。門人王寵書。此序草書極妙。丙申春正月」が得られる。松齋が読んだ丙申は寛政八年（一七七六）。舶載記録を確かめると、「寛延四年未四月、午七番船同九番船同拾番船 持渡書物覚書」に、「一 芸文類聚 一部二套十六本」、寛保二戊年に「一 芸文類聚 一部四套」とある。他にも将来があつたと考えられる。『芸文類聚』は『日本書紀』に利用されており、早くからわが国に伝来していた。

『芸文類聚』の版本は宋版一種、明版七種、清版一種。明版七種の九種類の内、嘉靖六（一五二七）年刊本は天水胡纘宗の序を持つ胡纘宗本であり、每半葉十四行、行二十八字。十六冊。次の年嘉靖七年に陸采の跋を加えて重印したのが陸采加跋本で、こちらは字句の異同が若干あるという¹⁹⁾。陸采加跋本は国立公文書館内閣文庫、東京大学東洋文化研究所などに所蔵される。松齋が披見抄写し、「極妙」と感嘆したのは、陸采加跋本の胡纘宗序で、末尾に「門人王寵書」ある。書影は東京大学東洋文化研究所アジア古籍電子図書館東洋文化研究所蔵漢籍善本全文影像資料庫に公開されて容易に見ることができるので、省略する。

『芸文類聚』の諸解題が欧陽詢序、胡纘宗序に触れることはあっても、王寵書に触れることは稀である。欧陽詢は唐人の書家として著名であるが、王寵もまた明人の著名書人である。王寵、字は履仁、又、履吉。号は雅宜山人、辛夷館、鉄硯齋。書画に巧、書室を采芝堂、石湖草堂、御風亭と言う。文集に『雅宜山人集』があり、嘉靖戊戌十七（一五三八）年に「王履吉文集序」を寄せたのは「友」胡纘宗である。伝は『明史』二八七巻ほかにある。「西苑詩」、「遊包山集」、「李白詩巻」、「琴操」、「雜詩」、「行草書九歌」、「宋之問詩」、「楷書詩」などによって知られ、明代を代表する書家として扱われる。

西林昭一『翁方綱の書学——『蘇齋筆記』訳註——』は、祝枝山の注に王世貞『弇州山人四部稿』卷一五四「芸苑卮言附録」の「国朝の書法は、当に祝希哲を以て上と為すべし。文徵仲・王履吉・宋仲温・宋仲珩之に次ぎ、（以下略）」を引く。宋仲温は宋克のこと。王寵の伝記は薛竜春著『王寵』に詳しい。ただこの王寵序については記事がない。⁽²⁰⁾

王寵はわが国においても人気がある。近代の一、二の例を挙げれば、旧版『書道全集』第二十卷所収の「蓬萊宮賦」、「長樂宮賦」はいずれも東京山本悌二郎氏蔵で、「本集掲ぐる蓬萊、長樂二宮の賦は両者殆ど同様の筆致にて妍麗玉の如く字体猶ほ其の永興の門より来れるを知るものである」（梅園方竹）という。『王履吉正書琴操一卷』は大正元年大阪油谷博文堂景印本の一帖で、外題には「王履吉正書琴操 内藤虎署 印（虎）（湖南）」（大阪府立中之島図書館蔵本）とある。⁽²¹⁾

近世文人の例では、林道榮とともに「長崎の二妙」と称された高天漪（享保六年歿、七十四歳）が王寵の書風であるという。⁽²²⁾ そのほかの近世文人にも人気があったのではないかと推測されるが、『享保以後大阪出版書籍目録』に「真草千字文 二冊 筆者 王履吉 板元 田原屋平兵衛 出願 寛延二年十二月」の出願記録に気づいたのみで、版刻されたかどうかも未詳である。⁽²³⁾

〔注〕

- (1) 奥田松齋とその著作については、多治比郁夫に「『拙古堂文集』と奥田松齋」などの先駆的な研究がある。（『京阪文藝史料』第一巻 青裳堂書店 二〇〇四）。
- (2) 『古今墨蹟鑑定便覧』（森銑三・中島理寿編『近世人名録集成』第四巻 勉誠社 一九八六）。
- (3) 図録『特別展歿後二〇〇年記念 なにわ 知の巨人 木村兼葭堂』（思文閣出版 二〇〇三）。
- (4) 稲田篤信「平成一五年度～平成一七年度 科学研究費補助金 基盤研究（C）研究成果報告書」に『拙古堂日纂』、『拙古堂雑抄』全冊の抄出書名と書誌的事項の注記を掲出したが、未定稿であり、改めて再編成したいと考えている。稲田篤信『名分と命祿』（べりかん社 二〇〇六）。
- (5) 北京図書館編・鄭振鐸『西諦書目』（北京図書館出版 二〇〇四）。『関西大学所蔵 内藤文庫漢籍古刊古鈔目録』（関西大学図書館 一九八六）。

- (6) 『関西大学所蔵 内藤文庫漢籍古刊古鈔目録』(関西大学図書館 一九八六)。和刻本は西川寧・長沢規矩也編『和刻本書画集成』第一輯収録(汲古書院 一九七五)。
- (7) 『名分と命祿―上田秋成と同時代の人々―』(ペリかん社 二〇〇六)。
- (8) 水田紀久『印籍考』解題(『日本篆刻史論考』所収 青裳堂書店 一九八五)。米田弥太郎「五 新興蒙所とその書学」(『近世書人の表現と精神』所収 柳原書店 一九九九)。
- (9) 『稿本大阪訪碑録』(『浪速叢書』第十卷所収 名著出版 一九七八)。
- (10) 高田衛ほか編『建部綾足全集』第八卷(国書刊行会 一九八七)。
- (11) 天理図書館蔵『藤篋冊子稿』所収。中村幸彦ほか編『上田秋成全集』第十一卷所収(中央公論社 一九九四)。
- (12) 島谷弘幸「董其昌と唐様」(『中国法書ガイド』五 董其昌』二玄社 一九八九)は、大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』(関西大学東西学術研究所 一九六七)所掲の舶載記録から董書の伝来を指摘し、細井広沢などの書学書から董書の流行と影響を指摘する。小稿の後述の舶載記録も大庭脩の研究による。
- (13) 中田勇次郎「明清時代の集帖」(『中田勇次郎著作集』第四卷 二玄社 一九八五)。
- (14) 任道斌編著『董其昌系年』(文物出版社 一九八八)。
- (15) 黄虞稷撰瞿鳳起潘景鄭整理『千頃堂書目』(上海古籍出版社 一九九〇)。四庫全書存目叢書編纂委員會編『四庫全書存目叢書』(莊嚴文化事業有限公司 一九九七)。
- (16) 大阪図書出版業組合編『享保以後大阪出版書籍目録』(清文堂出版株式会社 一九三二初版一九六四復刻)。
- (17) 宇野雪村『法帖事典』(雄山閣 一九七九)、容庚『叢帖目』(中華書局香港分局 一九八一―八六)、また先掲『董其昌系年』、劉正成主編『中国書法全集』54 明代 董其昌(榮宝齋 一九九二)などを参照した。
- (18) 祁小春『中国古籍の版刻書法』(東方書店 一九九八)。「拙古堂雜抄」第五冊にも。
- (19) 大東文化大学東洋研究所「藝文類聚」研究班代表遠藤光正著『藝文類聚(卷二) 訓讀付索引』(大東文化大学東洋研究所刊 一九九〇)。
- (20) 西林昭一『翁方綱の書学―『蘇齋筆記』訳註―』(柳原書店 一九九六)。薛龍春著・中国書法家全集『王寵』(河北教育出版社 二〇〇四)。
- (21) 『書道全集』第二十卷(平凡社 一九三二)。「王履吉正書琴操一卷」(大阪油谷博文堂 一九二二)。
- (22) 中野三敏『十八世紀の江戸文芸―雅と俗の成熟―』(二 都市文化の成熟―明風の受容―)(岩波書店 一九九九)。
- (23) 大阪図書出版業組合編『享保以後大阪出版書籍目録』(一九三二初版 清文堂出版株式会社 一九六四復刻)。私は都賀庭鐘の号のひとつ「辛夷館」は、王寵に由来するのではないかと考えている。岳玉淵の九疑(李日華)、西田嘉兵衛の頼古堂(周亮工)、森川竹窓の古香齋(蔡君謨)なども、中国文人をきどった雅号ではないか。本稿で言うところの文人は、学芸文雅に遊ぶ知識人くらいの意であり、中国で言うところのそれではない。